

「驚くという才能」(清水真砂子) ② 「読む」

○目標 エッセイをよむに、筆者の意見を讀み取る。

【一】(P10はじめ~P11.5)

「いい哲学者になるためにたった一つ必要なのは、驚くという才能だ」

ノルウェイの作家、ヨナス・ソールゲルは『ソフィアの世』の中で言っている。この「哲学者」は、「人間」と置き換えることができる。それにしても驚くことが才能とは、ユルゲルはなぜそう言ったのか。

少しだけ強い子供とつき合ってみよう。①強い人たちが何にでも驚き、好奇心をかき立てられていることは私たちがびっくりしてしまう。子供たちにとって遊べるもの、開くもの、触れるもの、すべてが珍しく、驚きの対象なのだ。初めて見る世界はどれも不思議に満ち溢れている。

では、それから十年あるいは十五年もたてば、おぼや驚くべきことなど私たちがはたかなくなるのだろうか。たしかに『人生に必要なな知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』というタイトルの本があるほど、人は人生の初期に、とりわけ人間の感情の領域ではかなりのことを学んでしまう。今さら不思議がるべきものがないにしろ。②二からは、もっとも思慮な人生が続くだけだ。なるほどそうとしが思えない日が私たちにはある。

【二】(P11.6~P12.1)

だが、③そんな日は来るのか。ある日私たちは、それまで体験したことのない自分の感情の揺れに気づいて、きよとする。若い友人の中に老いを、年輩の人の中に若さを発見してびっくりする。親と子があまりにわかり合えないことに驚き、いら立ち、速い昔の、会ったこともない人の言葉が自分の思いをびたりと言いついでいるのには④目を丸くする。世界には、施しを受ける側が礼を言うのを当然と考える人々もあれば、イスラームの人々のように、施しをする側がよそその機会を与えてくれたと礼を言うのが当たり前になっている人々もいる。両者には、互いが驚くべき不思議な存在として映るだろう。

今は自分のことしか頭にならぬ。もう少し足が細かったらどか、もう少し目がパツパツしていたらどか。また、だっだっ、(そのうら自分と、今一歩丁寧にきいてみよう。なぜそうなのか、考えてみよう。⑤快・不快も同じだ。なぜ私には、あるものが快であり、あるものは不快なのか。すると私にはまたまた多くの不思議なことがつぎつぎとあり。私たちが自身が、この存在そのものが不思議なのだ。

随筆(随想)とは？
筆者の体験したことや、見聞きしたことなど(事実)をもとに、考えたことや感じたこと(意見・感想)を自由な形で書いた文章で、エッセイともよばれます。
筆者の個性や人間性が表れやすく、それが随筆の味わいとなります。
筆者の体験(事実)と、感じたこと(意見・感想)を讀み分けましょう。

自己評価【A・B・C・D】

★はじめに、この「明いけ、言切ら、に注意してあげる。大事は主張であることだから、エッセイとしてあげる

随筆を讀む際は、次の点に注目しましょう。

- 1. 話題は何か
2. 人物・光景
3. 会話
何を感じているかが重要です。

まずは問題を解く前に、「事実」と「筆者の意見・感想」を讀み分けてみましょう。そして、「意見・感想」が述べられている部分に波線を引きましょう。

問一 傍線部①「強い人たちが何にでも驚き、...びっくりしてしまふ。」について、(一)なぜ「びっくり」するのか。本文中の語句を用いて簡潔に答えてよ。

子供だらにとっては、目にするもの、開くもの、触れるもの、すべてが珍しく、驚きの対象だ。

(二)「好奇心」の定義的な言葉を答えてよ。

問二 傍線部②「三からは...退屈な人生が続くだけだ。」と筆者が述べているのはなぜか。本文中の語句を用いて簡潔に答えてよ。「三」の答を明かにしよう。

人間の感情の領域では、既に人間の目に、学んでしまふ、すべてが驚きの対象だ。あんなの新鮮な感動は味わえなかつた。

問三 傍線部③「そんな日」とはどのような日か。本文中の語句を用いて、二十五字以内で説明せよ。

不思議がるべきものが、ななく、どこまでも退屈な日。

問四 傍線部④「目を丸くする」について、(五)内的な答をよめる(基本的な指し示す)のか、採す(外的な指し示す)のか、を答えてよ。

問五 傍線部⑤「そういう自分」とはどのような自分か。本文中の語句を用いて、簡潔に説明せよ。

自分の心しか頭には、ない。

問六 傍線部⑥「快・不快も同じだ」とはどのようなことか。本文中の語句を用いて、簡潔に答えてよ。あるものを快と感ず、あるものを不快と感ずる自分の、今一歩丁寧にきいよう。